

「近世部門」0805教室 一〇時半開始

『御伽物語』における「人間」の描かれ方

青木 詩織

延宝五年(一六七七)に出版された怪異説話集『御伽物語』(富尾似船作)は、全六八話中二二話に出典が確認できることが、先行研究により明らかにされており、その出典との比較を通じて各話の特徴が指摘されてきた。本発表では、それら先行研究を踏まえ、出典が指摘されている話群を取り上げ、あらためて出典との詳細な比較を行うことよって、各話の持つ傾向を分析する。

『御伽物語』の典拠が指摘される話群には、動植物の変化が頻出するなど、怪異譚としての展開を持つ話が多い一方で、人間の異常行動や心情に焦点を当てる展開や演出を見せる話も見られ

ることから、超常的な怪異よりも人間の内にこそ恐ろしいものが宿っているということが、主題の一つとなっていると考えられる。本発表では、これら出典を持つ各話の分析を通して、人間そのものへの視点、また描かれ方を明確にすることにより、『御伽物語』の全体像を論じる足掛かりとしたい。

(信州大学大学院)

浅井了意の著作における〈眇目〉

金 慧珍

本発表は、浅井了意の仏書と仮名草子に見られる中国の南朝梁の皇帝・梁元帝に関する説話を分析し、それらにおいて「眇目(隻眼)」にはどのような意味が付与されているのかを明らかにする。『仏説善悪因果経直解』『盂蘭盆経疏新記直講』『仏説地藏菩薩発心因縁十王経注解』の三書は『帰元直

指集』に拠って眇目の由来を説いているが、『無量寿経鼓吹』『新語園』では眇目が嘲笑や恐怖の対象として描かれるなど、扱われ方が異なっている。『無量寿経鼓吹』では「諸根不具」との関わりから眼根の欠損が説明されており、『新語園』では殺生の報いとして眇目が位置づけられている。また、『地藏十王経注解』には元帝を「異類ノ生」とする記述も見られる。以上の検討から、テキストごとに文脈は異なるが、了意の著作において眇目は悪業の具体的発現として把握されていると考えられる。

(東京大学大学院人文社会系研究科 研究員)

果心居士像の受容と変容

森 翔大

果心居士は、近世初期から怪異小説などに登場する幻術師である。多彩な幻術を使うエピソードにより、近世のみならず近現代の小説や様々なコンテンツで素材となつている。一方で、果

心居士の研究については、幻術描写や話の比較をふまえた作品の影響関係の検討や典拠の指摘などがあるものの、研究としてはあまり大きな進展はない。

そこで本発表は、近世前期から中期の作品を主な対象として、漢籍との比較を行い果心居士像の受容と変容を検討するものである。果心居士が使う幻術には、漢籍で描かれる道術や仙術の影響が見られる。また、漢武帝の亡き夫人の幻影を見せた道士左慈の伝説は、松永久秀の亡き夫人の幻を見せた果心居士の話に通じるものがある。

このような比較を通して、時に権力者を恐怖させ、思い通りにならない存在としての道士・仙人像が日本に輸入され、松永久秀や豊臣秀吉に相対する

存在としての果心居士像が形成されていったことを考察する。

(追手門学院大学)

『仏法舍利都』と『聖徳太子御伝記』

(江戸版) —— 紀海音における古浄瑠璃利用の一端 ——

大磯 裕司

『仏法舍利都』(正徳五(一七一五)年秋以前、豊竹座初演)は、紀海音による浄瑠璃で、時代物としては比較的初期の作品である。聖徳太子と仏敵物部守屋との勢力争いおよび守屋滅亡までが本筋として描かれ、仏法繁栄を寿くという内容となつている。本作の典拠については、吉永孝雄氏が「直接には多くの古浄瑠璃や太子伝絵解き(『正法輪蔵』との関係が想定できる」と示唆されているが、これまで特定されていない。

聖徳太子に取材する古浄瑠璃は五作現存するが、本発表では、その中でも『聖徳太子御伝記』(江戸版)と比較・

対照し、両作の詞章がよく一致する二段目口の椋木伝説、四段目口の片岡山伝説、五段目の守屋退治の場面を中心にその具体的な利用の実態を確認する。また、古浄瑠璃に依拠しない三段目の秦川勝・川光兄弟夫婦による忠義と義理の板挟みの場面に見られる特徴を検討し、本作の独自性を追究する。

(北海道大学大学院／北海道有朋高等学校)

平賀源内『前太平記古跡鑑』における悪役造形

—— 金平浄瑠璃の継承と転換 ——

奥田 粹ノ介

平賀源内の浄瑠璃は、寺社縁起の導入や勧善懲悪を旨とする作劇が指摘さ

れてきた。本発表では、安永三年初演の浄瑠璃『前太平記古跡鑑』を取り上げ、源高明・藤原千晴が悪役に据えられた意図を、金平浄瑠璃及び『前太平記』との関わりから考察する。

金平浄瑠璃は清和源氏を絶対的正義とするが、その敵は主に架空の存在であつた。一方、本作は題に用いている『前太平記』の叙述に基づいて高明らを敵役に設定する。安和の変における高明らの関与は歴史的に不透明だが、『前太平記』は彼らを首謀者と断じ、源氏台頭の物語を構築している。源内は『前太平記』に内在する「源氏正義」という金平浄瑠璃的ロジックを抽出して高明らを典型的な悪として造形し、さらに時代的に齟齬がある頼光らと直接対峙させた。金平浄瑠璃、『前太平記』との連関から分析し、源内がいかに先行作を換骨奪胎し、江戸の観客に訴求する勸善懲惡劇へと昇華させたのかを明らかにしたい。

(国士舘大学・東京経済大学非常勤)

芭蕉の最晩年をめぐるいくつかの疑問——元禄七年十月五日の「ふみ」と屋移りを中心に——

石上 敏

支考の『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』等によれば、元禄七年(一六九四)九月九日に大坂に到着した芭蕉は、翌日から発症して徐々に衰弱し、一か月余り後の十月十二日に御堂筋の花屋仁右衛門方でその生涯を閉じる。芥川龍之介の「枯野抄」をはじめ、多くの史家・作家・研究者が記す通りである。ただし、その前後を今一度仔細に観察するならば、これまで言われて来たこととは相容れないいくつかの疑問が生じる。芭蕉が最期まで等類にこだわったこと、十月五日になぜ之道(伏見屋久左衛門)の屋敷を離れて花屋方へと移ったのか、同日門人たちに送られ

た「ふみ」は誰に送られ何が書かれていたのか、芭蕉の亡骸はなぜ夜舟に乗せられて大津へと運ばれたのかなど、まだ考究されるべき課題は少なからず残っている。着目すべきは芭蕉が行路病者として亡くなったことであり、「ふみ」が發送され、屋移り(宿替え)のあつた十月五日を中心に、私見を述べたい。

(大阪商業大学)

古義堂と伊勢

——双方向でのつながり——

神谷 勝広

京都の儒学者伊藤仁斎が興した古義堂は、複数の地域とつながりを有している。しかし、従来、地方から古義堂へ入門者が集まってくるというつなが

りばかりに眼が向けられてきたのではないか。

今回の発表では、古義堂が伊勢へのつながりを求めていたことを指摘する。具体的には、古義堂二代目伊藤東涯が伊勢を訪問し、伊勢の人々(奥田三角・藤堂藩重臣・豪商川喜田家など)との関わりを深める。その後、古義堂は、いくつかの地域で拠点を持つようになり、双方向的なつながりを作り上げている。

(所属なし)